

平成 25 年度学術賞受賞者〈臨床領域〉

笹子 三津留 博士

兵庫医科大学上部消化管外科 主任教授

研究業績 癌外科治療における臨床研究の確立と欧州での胃癌標準手術の確立
Clinical studies in surgical oncology and establishment of
standard surgery for gastric cancer in Europe

笹子三津留博士のプロフィール

笹子三津留博士は兵庫県西宮市に生まれ、県立神戸高校卒業後、物理学を志し京都大学理学部に入学しましたが、学園紛争の最中、改めて人生を考え直して、翌年医師を志し東京大学理科III類に入学しました。

東京大学医学部医学科卒業後は同第2外科の研修医となり、都立病院などで外科の臨床修練を積み、1979年に同外科に入局。その後ラットの実験胃癌を用いて胃癌のレーザー治療に関する研究で学位を取得しました。学位取得直後の1984年夏より1年間フランス政府給費留学生としてパリ大学に臨床医で留学しています。当時チーフレジデントで、現在国際的に著名な外科医として活躍している二人の外科医と親交を深めたことは、その後の博士の欧州での活動に大きな影響を与えました。この留学を通し、我が国の消化器外科手術のレベルが並外れて高いこと、しかし、我が国の業績が十分理解されていないこと、また、国際的には癌のリンパ節郭清に関し様々な疑問が残っていることを強く感じ、後の研究の契機となったようです。

1985年に帰国して東大第2外科で医局長を務めた後、1987年に国立がんセンター病院（現国立がん研究センター中央病院）胃外科スタッフとなり国内での活動が始動しました。当時同胃外科の丸山圭一博士は海外への発信に努められ、海外から多くの研修生も滞在し、その後の幅広い人脈形成、さらには外科における臨床試験の実施などに繋がっていきました。笹子博士の手術手技は定評があり、世界18カ国で手術の指導をしています。1989年にはライデン大学教授として、いわゆるダッチスタディに参加しています。1995年からは本邦初の癌手術をテーマとしたRCTを開始し、日本臨床腫瘍研究グループ（JCOG）胃癌グループ代表者として我が国の外科臨床研究に大きな足跡を残しました。博士の明晰かつスマートな学会活動は万人の認める所であり、国内のみならず海外においても高く評価を受けています。2007年国立がんセンター中央病院を辞し、郷里の兵庫医大の教授となり、現在は後進の手術指導に多くの時間を費やしています。外科は「アートとサイエンス」の2面を持つと言われますが、その両面を見事に具現化した類い希な存在として、我が国の外科の世界、世界の胃癌研究をリードしています。

（文責 武藤徹一郎）

「癌外科治療における臨床研究の確立と欧州での胃癌標準手術の確立」の業績のあらまし

乳癌でのランダム化比較試験(RCT)の結果により、欧米では1980年代になり固形癌に対するリンパ節郭清の意義を否定する考えが広がっていました。一方本邦では、消化器癌に対する拡大郭清の効果を疑う者は少なく、洋の東西で大きな隔たりが生じていました。笹子博士はライデン大学van de Velde教授と協力してオランダにおいて当時の西欧標準であったD1手術（傍胃リンパ節のみを摘出）と日本標準であるD2手術（腹腔動脈の主幹動脈に沿ったリンパ節まで郭清する手術）を比較する試験を行いました。消化器癌分野における手術手技同士のRCTは100例以下の単施設研究しか前例がなく、胃癌の発生頻度の低いオランダで多施設共同試験にて実施した事は大いなるチャレンジでした。当時オランダではD2手術はほとんど実施されず、笹子博士が試験の冒頭4ヶ月間に手技の指導をしてようやく実現できました。しかし、重篤な術後合併症の治療など経験を要する部分も多く、術後死亡率がD1の4%に対してD2で10%となり、5年観察時ではD2が生存で上回るも有意差ではありませんでした。この試験から、外科手術の科学的評価を目的とした臨床研究では手術や術後管理の質を高く保つことが不可欠であることが判明しました。この経験を踏まえて、胃癌の発生頻度の高い日本でこそよい研究が実施可能と考えた笹子博士は、1995年より日本臨床腫瘍研究グループを率いて進行胃癌に対するD2手術とそれに傍大動脈リンパ節郭清を追加する手術を比較するRCTを実施しました。この研究では手術の質の担保に様々な工夫をし、両郡とも1%以下の手術死亡率でした。遠隔成績で差がないことがわかり、予防的な傍大動脈リンパ節郭清の効果は否定され、胃癌における合理的なリンパ節郭清の確立に結びつきました。この他にも食道浸潤胃癌に対する開胸手術の意義、胃全摘における脾摘の意義を検証する試験を実施しました。これらの研究が成功したことにより、外科手術手技に関する科学的評価法が確立し、本邦で膵癌、直腸癌などを対象としたRCTが実施されました。これらの試験の主な研究成果はガイドラインに反映されています。笹子博士はJCOG胃癌グループを率いて現在も複数の臨床研究を実施しています。

一方、欧州においてD2手術は一旦否定されましたが、オランダのRCTの15年追跡研究結果において、D2手術が胃癌の局所再発率そして胃癌死亡率を有意に抑制することが判明し、欧州のガイドラインはD2手術を標準治療とすべきであると2010年に書き換えられました。欧州の標準手術を変え、国際標準を確立した笹子博士の貢献は高く評価されています。（文責 武藤徹一郎）

略 歴

- 1976年 東京大学医学部医学科卒業
- 1983年 東京大学医学部助手
- 1984年 フランス給費留学生としてパリ大学留学
- 1986年 東京大学医学部第2外科医局長
- 1987年 国立がんセンター病院外科スタッフ
- 1989年 ライデン大学（オランダ）招聘教授
- 1991年 国立がんセンター中央病院医長
- 2006年 国立がんセンター中央病院副院長
- 2007年 兵庫医科大学教授